



Title	批判的社会言語学の地平 はしがき
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102288
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

はしがき

本プロジェクトは『批判的社会言語学の諸相』（2002 年度）から始まる、『批判的社会言語学の〇〇』シリーズである。これまで〇〇には、「諸相」以降、「可能性」・「射程」・「展開」・「課題」・「実践」・「展開」・「領域」・「方法」・「構築」・「展望」・「軌跡」・「潮流」・「まなざし」・「メッセージ」・「思潮」・「探訪」・「対話」・「深化」・「現在」・「様相」を当てはめて、様々なテーマに取り組み、今年度は「地平」をテーマとして取り組んだ。

本プロジェクトはまた、山下を中心に編まれ、世に問われた『「正しさ」への問いー批判的社会言語学の試み』（2001、新装版 2009 年）、『「共生」の内実ー批判的社会言語学からの問いかけ』（2006、新装版 2011 年）、『ことばの「やさしさ」とは何かー批判的社会言語学からのアプローチ』（2015 年）（すべて三元社）とも深い関連を持つ。さらに、2012 年度から全学的に開始され、山下が運営統括委員、植田がプログラム担当者に名を連ねていた「未来共生リーディングプログラム」とも関連を持つものである。

この間、これらの取り組みによって、社会と言語が交差する人間社会の様々な場に着目し、その姿を考察してきた。今回は、新型コロナウイルスによる経験を挟み、人間の移動がふたたび活発化するとともに、昨年度の「はしがき」で言及した「これまでの価値観や常識」のみならず、社会や世界そのものが崩壊しつつあるのではないかという懸念すら抱かせかねない現代社会の地平を社会言語学という共通の枠組みで、研究者それぞれの対象・アプローチから批判的に論じようとしたものである。

陳論文では、外国人受け入れの経緯が異なる大阪市と豊橋市を事例に、地域レベルにおける多文化共生政策の展開を比較分析した。ここでは両市の政策文書における「多様性」や「人権」の捉え方に注目し、批判的社会言語学の観点から施策言説の特徴を検討した。

王論文では、特定技能制度における自発的転職に焦点を当て、特定技能外国人と日常的に接触し、その支援の役割を担う登録支援機関の関係者にインタビューを行い、同機関が外国人の転職についてどのような認識を有しているのかについて分析・考察を行った。

川端論文では、応用言語学者の B. Norton の社会文化的アプローチを用いて、日本で生活する外国人移住者の第二言語習得課程における権力関係と主体性の変容について論じた。

植田の研究ノートは、2025 年 3 月 16 日（日）に日本韓国研究会の第 9 回研究例会のミニシンポジウム「日本語で朝鮮語、韓国語、コリア語、ハングル…といわれる言語をどう呼ぶか」で行った講演の内容に手を加え原稿化したものである。

山下の研究ノートは、2025 年 3 月 6 日（木）に行った最終講義「批判的社会言語学のはじまり」の草稿に手を加えたものである。

読者の皆様からの忌憚なきご意見、ご批判などをお伝えいただけたら幸いです。

執筆者一同